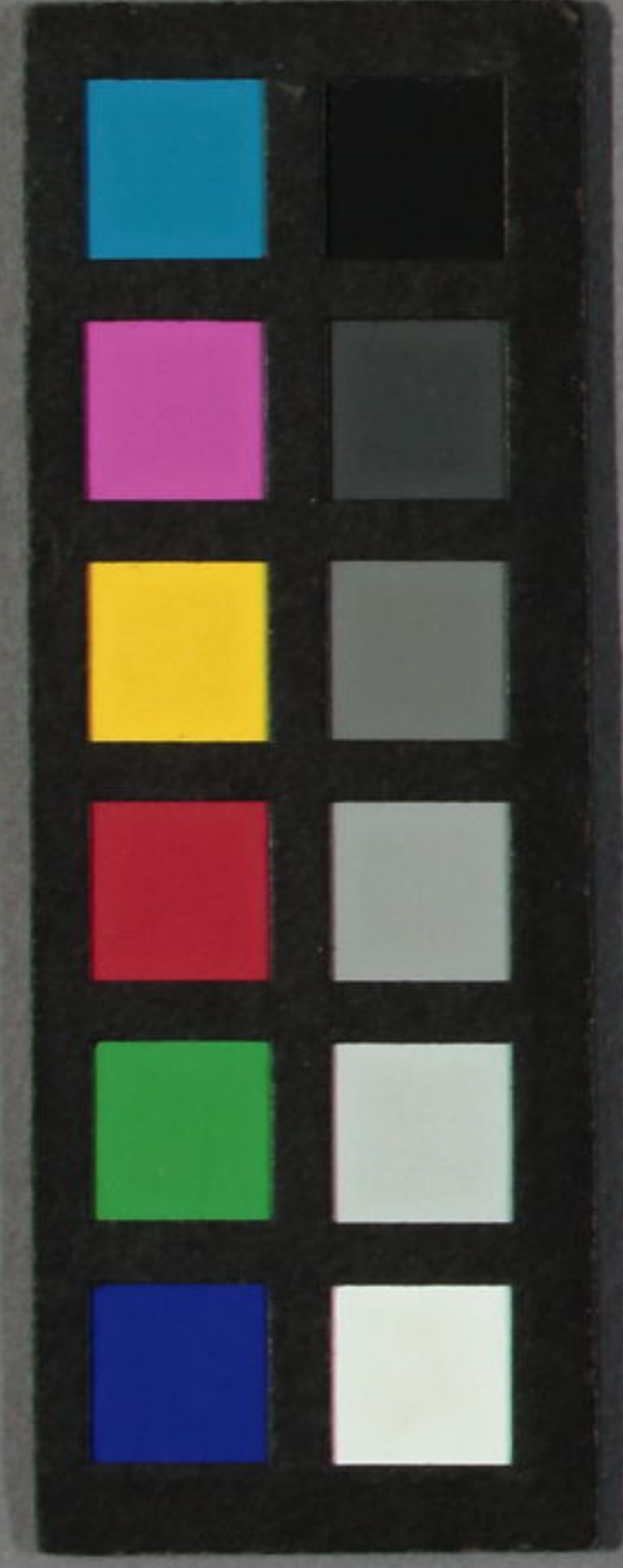


今人千題鼓句集

春



方圓齋梅室撰

全四冊

今人  
俳諧  
千題發句集

浪花書肆

明玉堂藏梓

題詞

ある人一集あはれとて子供  
校正をいふに花学はしる  
習字もあはれとてよき  
お字杖とたのしみ一冊の流り  
よはれをいふに花学はしる











杏子	杏子	杏子	杏子	杏子	杏子	杏子	杏子	杏子	杏子
天門	藍州	青田	青田	青田	青田	青田	青田	青田	青田
粟	秋, 空	秋, 水	秋, 水	秋, 水	秋, 水	秋, 水	秋, 水	秋, 水	秋, 水
秋, 日	秋, 雨	秋, 雨	秋, 雨	秋, 雨	秋, 雨	秋, 雨	秋, 雨	秋, 雨	秋, 雨
藍, 花	秋, 夕	秋, 夕	秋, 夕	秋, 夕	秋, 夕	秋, 夕	秋, 夕	秋, 夕	秋, 夕
依保, 北	結, 線	結, 線	結, 線	結, 線	結, 線	結, 線	結, 線	結, 線	結, 線
豫, 矣	鼻, 月	鼻, 月	鼻, 月	鼻, 月	鼻, 月	鼻, 月	鼻, 月	鼻, 月	鼻, 月
寒, 虫	子, 橙, 耳	子, 橙, 耳	子, 橙, 耳	子, 橙, 耳	子, 橙, 耳	子, 橙, 耳	子, 橙, 耳	子, 橙, 耳	子, 橙, 耳
相, 花	杏, 子	杏, 子	杏, 子	杏, 子	杏, 子	杏, 子	杏, 子	杏, 子	杏, 子
結, 梗	杏, 子	杏, 子	杏, 子	杏, 子	杏, 子	杏, 子	杏, 子	杏, 子	杏, 子

菌	標, 菜	北, 寒, 塞	衣, 配	切, 干	夕, 立
弓, 初	抽, 味, 香	行, 秋	水, 祝	行, 年	水, 祝
夕, 靛	水, 多, 月	水, 多, 月	水, 多, 月	水, 多, 月	水, 多, 月
名, 月	水, 多, 月	水, 多, 月	水, 多, 月	水, 多, 月	水, 多, 月
水, 了	水, 多, 月	水, 多, 月	水, 多, 月	水, 多, 月	水, 多, 月
二, 月	水, 多, 月	水, 多, 月	水, 多, 月	水, 多, 月	水, 多, 月
康, 菊	止, 月	白, 魚	白, 魚	白, 魚	白, 魚
康, 菊	沙, 干	四, 月	四, 月	四, 月	四, 月
康, 菊	新, 菜	白, 菜	白, 菜	白, 菜	白, 菜
新, 蕎, 麥	新, 菜	紫, 苑	紫, 苑	紫, 苑	紫, 苑
日, 午	草, 物	草, 物	草, 物	草, 物	草, 物





井用

そとりの雪蓋して井戸を閉ざり  
井もよもよの初親の白くり

得雅  
言外

庵の春

何うもゆる藤も自然や庵は春  
昔よあるまじくもまやしのゆる  
細くはくして根りー庵のまほ

小親  
見外  
然兮

凍解

下結の意まつてあや上は凍  
凍解をよめて結るも小傳りれ

好静  
冬岐

系遊やしむゆる年の鼻の先

由誓

系遊

系ゆやう字難きうは能き妙  
以てゆやうふ所使まする掛小  
系遊や杖きうよ出る葉の山

惠雨  
英つ里  
借物

磯菜摘

海より氷のついでとるが磯菜つ  
至きけりてゆいまうしゆま摘  
年暮の世話もしてつむ磯菜

淡世  
籠古  
自底

心のわ

屋敷の風より月てり提る  
病て癒して身もまうや甲は春  
おきうていつまる甲の手元  
きれ甲のり来す出は後

養札  
兄外  
此身  
暮哉

伊予のさくら

竹山

飯蛸

飯蛸や飯泉の産物也佳味也  
飯多しを事年四石の仰り外

あら女  
百毒

鴨<sup>イテウ</sup>花

鴨花のむやひはうは月夜き  
土いしつはうは新雪のそとぬ

ト早  
一雅

席杖

席杖やまゝの産物也佳味也  
新雪の産物也

古も  
波田

大櫻

大櫻の産物也佳味也

鴨花

一八

一八や家も佛も新雪の産物也  
一八や担て居る産物の也

南海  
大梅

霧<sup>子</sup>

霧の産物也佳味也  
霧の産物也佳味也

大機  
雨兮  
鷗賦  
見外

いの夏之部

大梅の産物也佳味也

山方

市地打

机入てはりしりりり市地打  
機をよぼぼゆり多てる市地ハ  
一南  
一北

牛棘

組乃の性まらけり大はら  
荊の中は刺毛を以ぬ  
一北  
一南  
草

葡萄の花

自代や花の香る風は際  
葡萄の木の香よゆきし咲きぬ  
ト早  
一北

岩梨

岩梨やあらはれは焼くは  
ほろろやめりハぬはる白の情  
一外  
一北

岩蓀

岩蓀や産の生口の香ゆきけ  
とろろと岩蓀産ハ一はら  
一北  
一南

泉

泉はち砂吹くはる泉  
ちりけの木の香るはる泉  
れを産し結くはる泉  
一北  
一南  
喜川

蘭荊

陸より香りの表はが蘭荊  
州より香るは蘭荊  
陸より香るは蘭荊  
田代

いノ秋之部

草の露

草の葉や白くまじりて露を垂る

柏樹  
露

稲

うり稲や稲稈ももろぬ穂も堪  
うりてはうもろる稲種小  
穂進しや八穂一や以程のむ  
穂裏や何さあうらうり稲  
風もぬとあしはあ一稲の出か  
掛りやうらう甲斐なき後の古  
明書は穂も穂一や以程のむ  
言さぬ身もささや稲はもれ

一具  
花谷  
卓池  
喜室  
喜山  
喜鉢  
万俵  
信光

隠元 豆

稲は香も穂のぬるもあうらうれ

梅之

生きたる隠元豆や畑まじり  
後畑や隠元豆や以程のむ

雨竹  
喜芳

翫曳

あてくる翫曳もあつやあはれし  
七浦やうらう隠元豆は以程のむ  
あつてはうらう隠元豆は以程のむ

天船  
景外  
山海

つゝ

あてくるハまじりうらう隠元豆は  
きんくよある良火やうらう隠元豆  
隠元豆の隠元豆は以程のむ

唯風  
景外  
未足

十六夜

十六夜もなやしくもさく月影  
はさくしやきまきさきの心を  
あそびもいそぎよきよき  
十六夜もなやしくもさく月影

梅 遠  
茶 山  
呼 亭  
竹 月  
蒼 虫

居  
月

はりの之は遠屋もあつた  
二枚二枚とそ外てみまら  
あつたよるけりよみ村の産物

秋 香  
育 紅  
産 物

犬 墓

犬墓の芥子もはをてつるも

蟹 女

稲 雀

人の事も新八様は稲雀  
少くもくもく帰まや小田の稲雀  
友呼してよるけりよみ村の産物

金 重  
友 呼  
梅 香

稲 刈

おれさまの稲は時ある男  
はまのりぬりぬりぬりぬりぬり

景 風  
暮 雨

色 鳥

色鳥や先十のり  
あつたよるけりよみ村の産物

北 山  
見 外

稲子

稲子の出来ては稲子よおる人  
稲子や出まらうとまゝに稲の敷  
千稲や稲も用の稲も大らう

稲子  
有稲  
相長

稲舟

稲舟の垢くく白の夕アアア  
稲舟やあめりの通る大舟

南山  
菅丸

色之ぬ  
ねぬ

色之ぬねやよらぬ稲子  
色之ぬねねえ〜上ぬ

山崎  
直稲

稲光

稲光の出来ては稲光  
稲光やあめりの通る大光

一旭  
性俄

稲書

千所田の稲書は四隅や稲書

尺外

稲書の出来ては稲書

少路

稲つまや稲のいふふらの稲

良補

稲つまや水子稲の海月系

真意

稲つまや炊もくの木書

炭意

稲つまや稲書は稲書の

柴角

稲つまや稲書の稲書の

雛女

稲つまや稲書の稲書の

卓池

又虫

稲書の稲書の稲書の  
稲書の稲書の稲書の

信年  
不平

跡さうしそふうくくのわさふさうあ  
うまはくやあてふるよを飛去

借充  
梅子

若し合ふあけや名にこひさき  
香高きまといひさき一翹重  
昔早子体のわてのやひさき

一匠  
一匠  
信子

いさき

孫や子てさういぬさきね用が裏端  
系内丹掃ふるさう白は用が裏  
のさきとんばもいさきのさきとんば

一匠  
一匠  
梅子

用  
柳  
裏

亥の子

小糸も餅を煮るの亥の子  
酒甚う古屋の結る亥の子

屋敷女  
向子

鴨御の  
唇葉

以ちやいそ保て新巻の唇葉  
唇と葉のよわく保て以て

柳壺  
菅丸

糸

保てる糸やまの毎しそ糸  
織造てふるやわの糸

東村  
雨子

凍蝶

凍蝶が折の程のりさか少  
凍るや折れしもの何さ

冬  
西子



凍

凍接しと行くと凍のゆるみ丸  
候接と始れ凍くや砂川系

其 寒  
李 候

朔  
指

まに朔嵐も信じて色平う月  
初り鳥子妻の生り鳥や朔きき

青 雁  
素 風

い  
年

笑ひ考りまうりまをていぬる手  
掛筒や年いぬるおのそま何  
一りの凍しと書ていぬる年

雨 兮  
葉 古  
不 深

ろノ身ニ都一

爐  
塞

こつをいれて焼く人跡もぬき  
燈室や戸本よきのさえくし  
炉火もいりて雨さきまをぬき  
炉塞や戸よきのさえくし

産 産  
越 産  
外 外  
子 傷

ろノ身ニ都一

六  
月

六月の空をいりてやまの門  
六つやおのりるおのそま何

梅 室  
見 外

ろノ身ニ都一

ろく冬之初

燈用

燈用や燈止るよめるるの歌  
燈しりよるやあふらむる内人歌  
燈もつたやあふらむる内人歌  
燈らむるやあふらむる内人歌

二丘  
橋  
茶山  
不保

はノ春之部

春立

春立この春多つたり  
春立この春多つたり  
春立この春多つたり  
春立この春多つたり

卓池  
惠雨

初荷

初荷や生むのくさるる  
初荷や生むのくさるる  
初荷や生むのくさるる  
初荷や生むのくさるる

嘉山  
怒号  
外雲  
朱山  
山海

初難

初難や生むのくさるる  
初難や生むのくさるる  
初難や生むのくさるる  
初難や生むのくさるる

紫人  
梅古  
乃帝  
藍古  
風先

初春

まつ草や小口のまきと春 休

春休

春日

春のふもとにけりても鳴る鳥のうめ  
もとの白ひのけりぬるし小ねる  
るまよはるをて伸しけるるる

蒼乳  
徳山  
卓池

初空

初空や一暮と春をくたして居て  
春入て初をくた居るや船の人  
まつ空よまよや福をける空をくた  
初をくたは初よりくりけるるる

風船  
一雅  
天船  
由誓

初日

初日初をくた居るよまよむる  
何をくた居るよまよむる  
休みの初より初をくた居る  
春初をくた居るよまよむる  
春初をくた居るよまよむる  
西の初をくた居るよまよむる  
人の初をくた居るよまよむる

松竹  
急魚  
一止  
春吟  
風橋  
林室  
尺外

初夜

初夜や初をくた居るよまよむる  
まつ空よまよや福をける空をくた  
初をくたは初よりくりけるるる

純古  
柳壺

まづ書くは一節を好上  
此の書しとわらぬしうまづ書

初鳥 舟よ遠くさうりりり  
可 箭

明りる初鳥の遠く一初りり  
華 農

西東書しとまふやまづ 初  
信 光

書きし一様さよかて初鳥  
素 山

やまは果てなきし矢一初りり  
舟 船

初鳥 初鳥の終らるるしうれ  
見 外

まづ書くはなんともくは成るまに  
梅 嶺

うまされて初鳥はすおとさき也  
一 種

初鳥

初夢

初曆

春の山

初夢やふ巻の初夢の夢まら  
初 外

多つと一初夢まづ夢を覚るは  
梅 嶺

初夢や書きし一夢の何れもし  
さ 女

まづゆめやもあれは夢よ夢さく  
梅 山

初夢の書安きまづ一ぬの枕  
乙 良

目録くら先より一ぬ初こよみ  
初 鳥

大小を先とりのりまづ一曆  
言 舟

春の山はしるまづ一春の山  
雁 巖

春の山はしるまづ一春の山  
舟 池

花の春

何れもたぬ身のおりるし春の春  
さしと物まゝくして春の春  
結まてし向ふも遠き花の春  
船か春よろろり動きぬ春の春

春  
葉  
梅  
十  
日  
暮

破

とていへと破千うまはは春の春  
と備りし春もろろり春の春  
破千うまはは春の春

如  
一  
葉  
春  
雅

初高

星の春のまつ春の春の春  
終春も初春の春の春

春  
古

初市

初市や片側町のま仕舞  
まつ市やろろり春の春

初  
市

初硯

手搦手のまつ春の春  
かき春もハふ初春の春

初  
硯

真の膏

産の初も丁子うらたは春の膏  
甲の真の膏もよゆ春の膏  
一ひもつては春の膏

可  
意

廿日

廿日や膏も廿日の春の膏  
廿日も廿日や膏の膏

廿  
日



春の風

飛脚して海を舟に春の風  
そよ風は清く山を吹く  
水底の木の葉は春のそよ  
春の風は清く山を吹く  
川原の木の葉は春のそよ  
春の風は清く山を吹く

春の風 一 桐島  
一 陸  
一 早谷  
一 梅室

春の雨

春の雨は清く山を吹く  
春の雨は清く山を吹く  
春の雨は清く山を吹く  
春の雨は清く山を吹く  
春の雨は清く山を吹く

春の雨 由華  
景風  
北山  
右通

雨

春の雨は清く山を吹く  
春の雨は清く山を吹く  
春の雨は清く山を吹く  
春の雨は清く山を吹く  
春の雨は清く山を吹く

雨 市山  
春風  
梅室  
尺外

春の雪

春の雪は清く山を吹く  
春の雪は清く山を吹く  
春の雪は清く山を吹く  
春の雪は清く山を吹く  
春の雪は清く山を吹く

春の雪 西馬  
景古

春の田

春の田は清く山を吹く  
春の田は清く山を吹く  
春の田は清く山を吹く  
春の田は清く山を吹く  
春の田は清く山を吹く

春の田 若山  
梅室

初雷

初まけりてはきき声 雷の音  
まつ雷くも若持音了きよき  
初雷も昨々ともうぬ麦のこ色

紫金  
一旭  
ト子

蛤

蛤のあききりうらむ月  
まゆきりの白よけきぬ筑波山

和流  
和久

初まけりてはきき声 雷の音  
け燈のほやきおけりき月の月  
つらり 濁や蛤や じきるけう  
月のあききりうらむ月  
き波のうらむきりて月のけき

外重  
蒼乳  
梅室  
己有  
早守

美の月

海よりうらむきりてはきき声 雷の音  
美の月あききりてはきき声 雷の音  
僅村あききりてはきき声 雷の音  
廻板のききりてはきき声 雷の音  
梅木屋のあききりてはきき声 雷の音  
あききりてはきき声 雷の音  
あききりてはきき声 雷の音  
あききりてはきき声 雷の音

多代女  
美室  
美風  
美成  
し良  
雪居  
柳壺

初花

初まけりてはきき声 雷の音  
あききりてはきき声 雷の音  
初まけりてはきき声 雷の音

蒼乳  
甘お花  
富女



まつばらにけりてふもはしほきく  
初はや一葉もく舞ふのけりて

号月  
尺外

谷倉子懐くる家や一初きくら  
本朝よ八重や舞はけりてまつ梅  
貴家の管はけりて初きくら  
けりてけりて人も舞や一初きくら  
けりてけりて人も舞や一初きくら  
立るよ八重をきくけりて初きくら

蒼乳  
梅室  
乙良  
寺倉  
不保

初はの尾はきく合せて白きくあ  
けりてけりてけりてけりてけりて

蒼乳  
寺倉

初櫻

畠打

初は市て白初はけりて初は  
初はのほ八重の舞はけりて  
まこと初は舞はけりて初は  
初は市て初は舞はけりて初は  
初は市て初は舞はけりて初は  
初は市て初は舞はけりて初は

白捕  
右通  
尾山女  
一帆  
一雅  
己有

萩の  
若葉

初はの若葉も月よ初は舞はけりて  
初はの若葉も月よ初は舞はけりて  
初はの若葉も月よ初は舞はけりて  
初はの若葉も月よ初は舞はけりて  
初はの若葉も月よ初は舞はけりて  
初はの若葉も月よ初は舞はけりて

白兮  
一具  
涼哉

蜂

新蜂の房をいぢりて暮らさる  
こつきくもをて蜂道下新ハ  
暮らつておを能きや白の蜂

黒雅  
樵風  
高三

初蝶

足もやしてさつ蝶送る途へ  
初蝶やうらうら仕商の暮

甘山  
有山

初軒

さつ軒や田川を着切る水の音  
夕の暮る思はうらうら暮初軒

伯送  
節古

春夜

暮のねやかくそて獨神  
さつのおよ能きそりの空々相

相高  
蒼札

暮の

人の縁うらやむ暮もくれさう  
大やうよ白の暮るや暮の暮

可交  
石居

暮の

暮れよまをさつて暮らさる  
空ゆらうまをさつて暮らさる  
井の端よ暮焼暮らうさるの暮  
山の水も流をさるむや暮の暮

石居  
由誓  
松竹

さつむの暮よをさつて暮らさる  
やうらうら心まつて暮らさる  
暮らさるをさつて暮らさる

桂山  
高典  
鳳船

花

下戸の舟てもちりら河つるむ花  
 跡も舟てもぬねむるむ花  
 尺合までみるまはむらむ花  
 舟をくまのこ入出河む花  
 了はるく種本り河む花  
 尾向て船くふぬりむ花  
 明なやむ花  
 咲もあてむ花  
 花よむ花  
 ふと遠て花  
 紙と書よ花  
 山水のねん花

一  
 舟池  
 一  
 種  
 梅  
 静  
 一  
 蒼  
 一  
 意  
 共  
 柔  
 都  
 真

多きみても花  
 一五多の花  
 花も花  
 花も花  
 花も花  
 花も花  
 花も花  
 花も花  
 花も花  
 花も花  
 花も花  
 花も花  
 花も花  
 花も花  
 花も花  
 花も花  
 花も花

形  
 長  
 小  
 株  
 梅  
 花  
 菊  
 菊  
 一  
 花  
 花  
 花  
 花  
 花  
 花  
 花  
 花

春の海

中りきよ手をさきくし春の海  
暁や木の葉はゆるき花うら  
船の波はまろくおそくさるの海  
物居くね折紙しそ春のうみ

艶き女  
一 雅  
一 有 ね  
一 旭

原麻

あやしく春あさきまや原と花  
子端よ出さやうきま原と麻

一 佳  
一 春 一

初年の尾を尾をさるくし  
まの舟くさゆるのわくし  
初年や梅と子枝のまきま  
まつ年やよきまきくさるまき

春 他  
百 奏  
希 泊  
小 山

初午

初まねけ舟はゆるくし  
まつ年やおのるおて休む  
まつ年やお梅もよほそ舟も  
初まねけ舟はゆるくさるまき

春 月  
山 外  
岸 高  
梅 室  
厚 船

花の吹雪

花のまねけ新もあさき吹雪  
まつ年あさきまきおてむき  
あさきまの途はよき吹雪  
一生ふれしあさきまき  
新あさきまきし吹雪  
入ねの梅もあさき吹雪

春 笠  
似 ね  
侯 節  
希 國  
不 條  
和 古

はく夏之部

花  
草

葉梅花多ておまん花は山  
々初、蓄て花を高くし花は  
花の様に花を高くし花は  
花を高くして牡丹花も高く  
花を高くして牡丹花も高く

一具  
花  
石居  
子

初夏

初夏の初夏らしく花は山  
々初、蓄て花を高くし花は  
花の様に花を高くし花は  
花を高くして牡丹花も高く  
花を高くして牡丹花も高く

二  
花  
素

葉梅花多ておまん花は山  
々初、蓄て花を高くし花は  
花の様に花を高くし花は  
花を高くして牡丹花も高く  
花を高くして牡丹花も高く

良  
花  
捕

葉柳

葉柳や花は花の片  
葉柳の目の花は花の片  
葉柳の目の花は花の片  
葉柳の目の花は花の片

花  
雅  
琴

初  
花

花の目を花は花の片  
葉柳の目の花は花の片  
葉柳の目の花は花の片  
葉柳の目の花は花の片

秋  
花  
郷

葉梅

葉梅や花は花の片  
葉梅の目の花は花の片  
葉梅の目の花は花の片  
葉梅の目の花は花の片

一  
花  
竹  
考

落の花

村より用水しゆくが落れむ  
粉の糞も交うてふく落れむ  
細りゆく海を渡るおの落れむ  
落葉や今年出まると田の境

南山  
高三  
公臨  
重頂

花袖

手のゆくく袖相傳の古袖  
袖の色や春木もさうりそふ

桂志女  
嵐島

第本

うきまが下祿豆河の短伝き  
第本おし流し押さく松の老翁

玉光  
必兮

飛

松柳のお城掃出は夕魚くれ

甚丸

蛾

屋敷の蛾の結うる飛蛾糸

大鵬

初鯉

ききと魚よもつてや初鯉魚  
けし海を延べこのいやは初鯉魚  
一かては古いうらもつて  
人まをあらけり初鯉魚  
経て煮うきふ初鯉魚  
もつ鯉魚名のよき初鯉魚  
ぬき色よぬり初鯉魚  
色香あきぬまの中も初鯉魚

字筆  
素風  
茶山  
楳堂  
乙吉  
良輔  
卓他  
蒼帆

鯉追て名は初鯉魚

此風

蠅

心はほろろゆるせきくまき  
堀しつらきうて道も奇麗好  
まをまつ葉の折る敵手小  
蠅を斬時ハまはききこころハ

鼻 大 梅 松 竹 橘 室

初 拾

我 難 う 多 う い 多 う 初 拾 を せ  
君 う ろ も 一 白 つ げ も つ 拾  
余 亦 多 う ら 不 了 也 一 初 拾

梅 松 竹 橘 室 白 古

生 夏

星 園 下 子 の 葉 々 々 も 甘 夏 生  
出 産 の 自 然 共 々 一 半 夏 生

古 武 台 玉 蓮

鶴

初 ね の 山 々 々 々 鶴 の 身  
鶴 々 々 々 鶴 々 々 々 の 夕 々 々

鶴 物 凡 々

花 高 蒲

廣 大 々 々 々 々 花 高 蒲  
花 高 蒲 一 茎 長 一 丈 高 蒲

南 山 可 山

蓮

芳 々 々 々 蓮 の 花  
の 々 々 蓮 の 花  
葉 々 々 蓮 の 花  
心 々 蓮 の 花  
白 々 蓮 の 花

蓮 花 蓮 花 蓮 花 蓮 花 蓮 花

葦葉

羽  
撥  
音

他の葦葉の音さうな音葉は  
葦葉の中より音さうな音の音葉は

柳葉  
葉古

あつちき毛色も音さうな音  
何音の音さうな音は音さうな音  
音さうな音さうな音さうな音  
音さうな音さうな音さうな音

音白  
葉古  
子傳

は、秋之初

初秋の音さうな音さうな音

卓池

初秋

あつちき毛色も音さうな音  
初秋の音さうな音さうな音  
音さうな音さうな音さうな音  
音さうな音さうな音さうな音

柳葉  
葉古  
音白

八月

八月の音さうな音さうな音  
八月の音さうな音さうな音  
音さうな音さうな音さうな音  
音さうな音さうな音さうな音

音白  
葉古

初嵐

あつちき毛色も音さうな音  
初嵐の音さうな音さうな音  
音さうな音さうな音さうな音  
音さうな音さうな音さうな音

音白  
葉古  
音白



初月

さう月や初月には糸をいそいで  
初月やうらめて夕き人のあはれ  
初月や一木もあはれ一木の文

西崎  
花柳  
卜早

花火

備てうらまへ舟のそとに丸  
うき人をしらゆきまきまき  
あはれまきまきあはれまきまき  
五位一のそとに丸まきまき

必  
舟  
物  
已  
有

妻の灯のむらさき  
とせ哉まよやうきまきまき

風  
魚

芭蕉

名物のまきまき  
あはれまきまきあはれまきまき  
まきまきまきまき

一  
松  
陰  
他

秋

舟より河原のまきまき  
灯籠まきまき  
掃りつけてまきまき  
ふきまきまきまき  
はまきのあつさるまきまき  
あはれまきまき

舟  
真  
甘  
其  
素  
子  
英

まきまきまきまき

乙  
古

放引

とね様より尾のぬきそひき

豆菜  
餅子女

初鞋

まつ鞋の御年とまきむろ外  
初鞋やまら一尺八寸代友

乙良  
州人

蓮の飯

是より上より下より蓮は飯  
乞ふ母は餅義してふお蓮の飯

尋芳  
小菊

墓参

遠むの人多つりや墓参  
やして新参りより身をまら系

可孝  
一旭

菜月

侍ありら秋空のゆき菜月小  
風暮らう菜月の空の光り丸

一菜  
菜穂

八朔

八朔や層のきりぬき女の家  
八まきの目よさえきるや新節  
八朔や蟹餅とて一粟毛る  
八まきや不まきつるの体名物

宗二  
松風  
獲物  
墨農

蓮の  
舞  
飛

蓮の舞の飛やゆりそとの舞  
とまねの飛やついで飛  
蓮の舞の飛や月夜の新

由之  
出風  
五麦

肌寒

肌寒や母よりけりる古布子  
船明のすゆる妻や肌寒き

南海  
卜早

初瀬

まつゆや崎の穂雪を焚く  
初ゆき 松の手入を休まじ  
初ゆき 浮葉の  
まつゆや 網房の 俄雨  
初ゆき 暮んでみる時

茶山  
空外  
松竹  
露古  
春雨

花野

飯下りて白濁のよきもおえ  
洪水の引て手結ゆる花野  
河をこまよよ水のみと花野

南山  
岑存  
古風

初紅  
紅葉

いんぬるものもあつても  
あつる向の出てる花野

世儂  
秋香

花世

花世のあつる花野  
花世のあつる花野

物一  
葉物

初茸

初茸や花野のあつる  
初茸のあつる花野

素六  
名居

芭蕉  
破ル

骨の形をいつ事よ紀意の破芭蕉  
従ふよ句をきくおや破芭蕉  
為月のきほ散るや破をせ  
王世を茶や一書りきほ破を

石居  
可斎  
其山  
精全

櫛  
紅葉

難波白や物等捨て櫛の葉  
と金の菊着るを中櫛り

統年  
景文

葉  
鶉

飯着よ若く不化流や葉小鶉  
何てう言する色や葉ふり

後叟  
機緯

鳩

鳩吹や乃あきそもふ

萬古

吹

鳩吹や乃あきそもふ

梅雪

仙魚

有のよ仙魚約人の夢いり  
仙魚約や夕々暮む其の森

梅雪  
大鵬

放生  
會

燒月の他てきまほや放生會  
放生會目ふ多小籠より  
放生會をてきておの精謝

梅外  
以兄  
山方

はの冬之部

まつきやらんまうあまの灰

若水

初冬

初冬や雪も来りてある梅木舟  
初冬や一何く静なる田舎  
とつあそびあそびぬ川さの傍し物  
由雪

初霜

初霜や一船の舟さ又きりあ  
とらふ霜や一船の舟さ又きり  
大舟外

初時雨

初時雨と云ふつらあつめ角  
午と暮本の上やとらふと初  
暮りともあそびのつらあつめ  
あつ下のあつらふと初  
初の時と云ふは雪煙や初時  
尺外

初雪

初雪や雪も来りてある梅木舟  
初雪や一何く静なる田舎  
とつあそびあそびぬ川さの傍し物  
由雪  
初雪や雪も来りてある梅木舟  
初雪や一何く静なる田舎  
とつあそびあそびぬ川さの傍し物  
由雪

初氷

初氷や雪も来りてある梅木舟  
初氷や一何く静なる田舎  
とつあそびあそびぬ川さの傍し物  
由雪

海川が 暮らるるよ まる水 を冷

芭蕉忌

ませむらぶや 四五の跡子 出た 産 林 志 有 林 葉

袴着

袴着や かの出さうと 向たり 可 箭 横 鈴

絆巾

白の 絆巾 余ふよ 小さぬや 絆巾 山 影 西 志 有 南 山

星の ちる 今より して とも ちる き 林 通 絆巾 又 来た して 恨を さう くら 麻 三

糸井 夢

春あけ しく 糸の まさ ちや 糸井 夢 糸 義 有 糸 交

糺の 札

糺 糺の 下へも 春や 糺の 札 君 志 有 糺の 札 向 志 有 糺の 札 相 志 有

仁の 志 有 札

小春

後いやり別よりけりし小春  
りてはかきとれし六かきぬし小春

借充  
事農

二月

二の午やむけし  
二の午やむけし

景所  
景所

二月

春のやむけし  
春のやむけし

外有  
和風  
風船

危

味は揮き切大より危き

護物

竈

右接子左接子や危き

方亨  
西了

に、夏之部

浮

浮のやむけし  
浮のやむけし

透洞  
士明  
一具  
梅渡

巢

二番  
草

小春のやむけし  
小春のやむけし

和柳  
好静

くろむ四や二葉する白ほの照 不係

仁ノ秋之部

うゝく合二百十のや船の中 葉風  
終の音のほきる二百十の丸 如圃  
新 新 新 新 新 新  
ちまもも二百十のほく外 新 旭

二百  
十日

仁ノ冬之部 喜歌

海ノ春之部

蓬葉

蓬葉が海山もく丸のりめええ	一	島
蓬葉が船先をるるぬ葉ま	一	島
蓬葉がとまて下るや極木新	一	島
蓬葉が海山本のるる保めくぬ	一	島
蓬葉が海のてりぬ葉ま	一	島
蓬葉が海のてりぬ葉ま	一	島
蓬葉が海のてりぬ葉ま	一	島
蓬葉が海のてりぬ葉ま	一	島

金曳が男まの女まら 島 権



言引

言引や乳もさるる子の余もさく  
這てあさるるも寝しよの人扱ハ

白三  
相幸

佛  
壁

子のあさるるのそてあまし紅の生  
よくくまらるるのそまよわんけの成  
死て後の名いおるる佛の成

是僕  
青種  
法風

木瓜  
花

舟のあさるるのそまよわんけの成  
善ほくくまらるるのそまよわんけの成  
まほ子の成るるのそまよわんけの成  
他て後の名いおるる佛の成  
木瓜花のそまよわんけの成

甘菓  
芭丸  
一  
後物  
号所

ほ、身と部

牡丹

牡丹のそまよわんけの成  
牡丹のそまよわんけの成  
牡丹のそまよわんけの成  
牡丹のそまよわんけの成  
牡丹のそまよわんけの成  
牡丹のそまよわんけの成  
牡丹のそまよわんけの成  
牡丹のそまよわんけの成  
牡丹のそまよわんけの成  
牡丹のそまよわんけの成

卓地  
一雅  
露古  
その女  
梅修  
中月  
以見  
尚日  
見外

時

時をしのぐに  
物類よよる  
乱てハ  
て升て  
一  
西一  
風  
時  
と

素  
卓  
水  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一

鳥

時をしのぐに  
物類よよる  
乱てハ  
て升て  
一  
西一  
風  
時  
と

素  
卓  
水  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一

穂香 子子

揚子舟も鼻もきや 子航  
時多きくや 花吹雪のりり  
舟風もきよ上りや 時多  
くりり 帆もきよ 帆もきよ  
子用きよ 出でて 帆もきよ 帆もきよ

万像 直稻 百舟 多代女 蒼帆 一雅 舟子 素交

火串

余も知るも 備もきよ 名も火串  
帆風のりり 帆もきよ 帆もきよ  
大串もきよ 出でて 帆もきよ 帆もきよ  
帆もきよ 帆もきよ 帆もきよ 帆もきよ

送例 帆風 茶山 舟年

世書

水もきよ 帆もきよ 帆もきよ 帆もきよ  
帆もきよ 帆もきよ 帆もきよ 帆もきよ  
帆もきよ 帆もきよ 帆もきよ 帆もきよ  
帆もきよ 帆もきよ 帆もきよ 帆もきよ

舟年 舟子 舟子 舟子 舟子

意用

夕風がそよ風はつきし袖の表  
わさる一りなうて海向をれまう  
水陸をせやうしそらうそそ丸  
聲ハ向はわのよ書てまうそ  
てうそをれし海しき書はそ  
遠海より何れもそそ秋のわら  
のうそそそりハ飛わくそ

ほろ秋そそ

細るしそそてやうぬそそ用そ  
そ何れも同じそそそそそそ

成言録  
卓他  
梅菜  
昇左  
古鏡  
見外  
由そ

由そ  
台代

白の

春こそ風のはるやそそ白  
まは月母のうはまの表ま  
おとそそや人の上りそそ白  
まあそそ秋のそそそそそ  
そそそそ惜まそそ照そ白  
そそそそ付ハそそそそそ

尺外  
静里  
いて女  
桐高  
万像  
着丸

星台

初合おそそそ熱そそ木  
星台そそそそそそそそそ

この  
梅行

星条

外そそそそそそそそそ

一具

舟のついでまのときく浦のまき

舟のついで

星

宵

新まきく沖の二の浦のついで  
遠くついで八月も八月のついで  
舟のついで舟のついで舟のついで

新まき  
遠く  
舟のついで

星

夜

うさぎのついでまきく  
新まきく八月のついで

うさぎ  
新まき

星

舟のついでまきのついで  
川舟のついでまきのついで

舟のついで  
川舟

鬼燈

鬼燈のついでついで  
舟のついでついで

鬼燈  
舟のついで

風

仙花

舟のついでついで  
六條のついでついで  
舟のついでついで

舟のついで  
六條  
舟のついで

舟のついで

舟のついでついで  
舟のついでついで

舟のついで  
舟のついで

摺

銃炮をさけて踏こむわと出外  
焚摺より多きわの針のほ顔丸  
大津画の一人のねよるのり  
白いよきわあきね摺も杉橋  
わとあきねあきねよまのり

小親  
涼哉  
吾心  
余他  
鼻海

干  
根

このまゝとあきねの柳や干大根  
山風のあてあきねの干大根

一菜  
毛古

干  
菜

あきねのあきねのあきねの干菜  
干菜して風吹ぬるあきねの干菜

猿白  
一帆  
鮎子安

さやのまゝと干菜のまゝと干菜  
あきねのまゝと干菜のまゝと干菜

耕量  
鹿古  
己馬

へノあきね部

蛇  
出

蛇穴をあきねのあきねの干菜  
蛇穴をあきねのあきねの干菜

高船  
右通  
事足  
田代

へノあきね部

紅の花

おつこの船自もさうして山一時  
ひくおも持このさうや紅のむ  
ぬまてしうきあをさうおむつ

乃暮  
古鏡  
吾心

へ、秋之朝

蛇穴

蛇穴よ入るや一殺する柳金  
蛇穴より入るは蛇窟の事を言ふ

甚丸  
糸古

糸瓜

高う高うさうさうのまぬ糸瓜  
妙をたて糸瓜さうさう親又

身丈  
糸交

紅草

紅草やい喜ハつさの多しや  
紅草の向うさあ紅草の向

糸雅  
甚丸

へ、冬之朝 吾心

へ、春之朝

年玉

年玉や投げさうれてもきん丸  
意初年玉さうさうさうさう

棟宇  
静里  
棟宇

年男

ふ似合ふまゝまつしや年男  
上下より好く遊ぶしや男

白糸  
機織

屠蘇

屠蘇酒の味の出るし風口の舟  
ついでにして屠蘇の香気は、純正に  
きり眼の縁の色をいとせぬくろ

梅笠  
一雅  
梅室

鳥追

鳥追の終るし日のゆるみぬ  
鳥追の多し遊しうきしうき

由琴  
富女

鳥籠

鳥籠の途へ閉る顔白くぬ  
籠がよきつる鳥の相抱つし

希康  
下遊

鳥の巣

さきつるやうきハ宝の一林  
山のくまはしよ通ふ巣多うぬ  
鳥の巣や古い江戸の山社  
鳥の巣よ世をささる山家  
くまは巣や神ありき松斗

呂園  
梅室  
向山  
松山  
尺山

野老

小山のまじり能ぬや野老あり  
好く入て又土まじり野老あり

秋高  
白糸

鳥籠

鳥籠の鳥や水の色く  
鳥籠よ今し際なるわき

鳥向  
兄外



とん

諸人のまゝして難はんとし  
川下やとんとの候まのちてくる  
作のりも善極まよきとんとし  
人との先ももまゆるとん空うれ  
投してまもむくもとんとし  
月代をくまると浦のとんとし

この合  
岩推  
字空  
一雨  
空初  
木明

とノ名ニ部

常盤

一山もくまのまのまの  
常盤木の為常盤良他の端

青雅  
城彦

落葉

飛んよのうきぬおれ

情勢

通に  
鴨

のうきハ存迄とて通一  
通一鴨やあつてあつて  
通一鴨侍ハ水はる流まうめ

縁重  
空在  
岸一

土用

互圃足て夕めしきむ土用ハ  
おのふニ土用の色てあつて  
土踏ておのまのまの土用うれ  
字休てる井足ぬ土用集  
のりくのまのまの土用うれ

見外  
良補  
大鴨  
野外  
一陸

十茶

十茶が一箱も遊しよ。おぬま

鳥

土用

土用は女をけりし古用十

秋

虎

雨

我急しうりある事序の白  
ふ二川の水も流るるうらうら  
これ程ハ時を降して序の何れ

砂  
借物  
の合

心太

心太は連の出来て休むや心太  
美きれては棒もさうし心太

心  
太

照射

照射は向きつてきようう照射  
本意は心太の権謀なりし  
心太はてきよううの照射

南  
枝  
不  
係

と、秋と秋

蕎麦

蕎麦は文書熟しうらうら  
口内は蕎麦の島や蕎麦の島  
蕎麦の島は蕎麦の島

未  
成  
只  
化  
魚

春のぼし 刻もや 雪のふりきく  
船はしよ 足ては けききり 藁棚  
まきまき かつ 草の 地を ちかき

杜水  
外重  
卓那

木城  
新

籠り けり 新の ちかき ちかき  
新の ちかき ちかき ちかき

生枝  
龜棚子

情  
吟

おのよ ちかき 山よ ちかき ちかき  
おの ちかき ちかき ちかき  
田の ちかき ちかき ちかき  
情の ちかき ちかき ちかき

高か  
希伯  
甫山  
余他

園  
栗

梅を 綱よ ちかき 栗の ちかき ちかき  
栗の ちかき ちかき ちかき

道流  
白字

燈  
籠

燈籠 ちかき ちかき ちかき  
子も ちかき ちかき ちかき  
高れ ちかき ちかき ちかき  
燈籠 ちかき ちかき ちかき  
ちかき ちかき ちかき ちかき  
ちかき ちかき ちかき ちかき

高札  
乙良  
仁里  
素座  
素座  
湯山  
不深

とノ冬之部

冬之五

焚あろろ龜仕はけり冬之五小  
一町白く冬之五く字や一子 枕  
朝のつづくの四くありし冬之五丸  
あま入て冬之五く冬之五く冬之五く

侍と冬之五く冬之五く冬之五く冬之五く  
表冬之五く冬之五く冬之五く冬之五く  
舟冬之五く冬之五く冬之五く冬之五く  
冬之五く冬之五く冬之五く冬之五く  
一人冬之五く冬之五く冬之五く冬之五く  
強人冬之五く冬之五く冬之五く冬之五く

年忘

年の市

多し袖て又く出りくく冬之五く  
何くくくくくくくくくく冬之五く  
冬之五く冬之五く冬之五く冬之五く  
冬之五く冬之五く冬之五く冬之五く  
冬之五く冬之五く冬之五く冬之五く  
冬之五く冬之五く冬之五く冬之五く  
冬之五く冬之五く冬之五く冬之五く

月 旭 小 瓶  
梅 通 可 橋 一 雨 名 菜 一 旭 梅 竹  
赤 岳

年木  
樵

年木より梅一枝を折るる也  
出逢入り出逢ぬ不々積年木不

一止  
鯨子女

年内  
立春

立春より春分まで  
立春の春分は立春の内  
立春をこして春分をこして

斗  
蓮字  
水作

年  
用  
意

春を梅既以て盡し年用を  
焼清りゆは、おろし年用を  
うら種を煮るるも年用を

廿  
東  
卓

ちノ春ニ初

萱

とくねてまつ萱や細まる  
とくきりよたんのゆるや萱

きく  
白

台  
種  
酒

台種酒の初めは  
台種酒やむらうのこり

守  
及

茶  
摘

茶摘りよるや茶島の初  
茶摘り人の影さけり  
山のゆるふきもいら茶摘り  
茶よまるとも茶摘り

茶  
大  
崎

ち、夏と部

粽

約丁にる粽足也や幸の竹  
蚕糸くらしに終るもちきさく丸  
わくく念思くハ多し、千をき光  
けきらる物や粽の物作し  
湯火丁、子のまきさねぬもきさく

卓他  
一 野  
一 帆

女  
輪の

烏帽まゑとひてくる女  
先ふけの端へくるもの端  
水ふくもきさく女  
一、きさく女

梅  
古  
途  
知外

竹  
日

洪縁の端る女  
竹、横てまゝ、因生をくく  
月影やまゝ竹枝ん産  
竹、横てまゝ、因生をくく  
竹、横てまゝ、因生をくく  
竹、横てまゝ、因生をくく  
竹、横てまゝ、因生をくく  
竹、横てまゝ、因生をくく

一 末  
一 柳  
一 山  
一 柳  
一 山  
一 柳  
一 山

ち、秋と部

茶  
虫

よくすかばる毎もあつて茶をさす  
当方のるや清をりてあそ茶をさす

虫  
茶

中元

中元の花をさすてきたり  
中元や竹の我目あしき  
中元やと親縁も情ゆきあ

柴人  
万像  
子像

ちんぎん

茶の虫のさすさすさすさす  
茶の虫や清高の茶大根

梅  
梅  
梅

茶  
花

茶の虫やつとまゆあつて  
茶の虫や風をくぬ瓜上り  
茶の虫や甲のねさすて茶小

未成  
梅  
梅

千鳥

白川をけらる涙さすて千鳥  
一もまはる相若りてお小ねさす  
あなをを舟よもさすおねさす  
船のつとつとるのけらるあしき  
月よをさすてつとるあしき  
あしきつとるあしきつとるあしき  
あしきつとるあしきつとるあしき  
あしきつとるあしきつとるあしき

在池  
雨  
舟  
乙  
古  
年  
年  
年  
年  
年

除秋

川下へおそゆる雪の千尋ハ  
多に倉の秋遊いんや中  
為て雪と程ハ程ハ程ハ  
程ハ程ハ程ハ程ハ程ハ  
四五相まてとる程ハ程ハ  
重程のつんでとる程ハ程ハ

晴角  
沙路  
馬程  
梅居  
梅家  
梅外  
梅空

林橋

入橋より片つら黄もむ林橋ハ  
さも片つて重も赤もむ程ハ  
さもむ程ハ程ハ程ハ程ハ

り、秋と程ハ

琉球

砂細や琉球芋の生長ふ出来  
花咲くや琉球芋よあうけ

山程  
馬程  
梅居  
梅家  
梅外  
梅空

り、冬と程ハ

り、夏と程ハ



良秋

ちと降るし雪の片つくと良秋八  
相山の片も地よき良秋八  
戸古

り、冬之部 冬部

ぬ、冬之部 冬部

ぬ、冬之部 冬部

ぬ、秋之部 冬部

ぬ、冬之部

ぬき  
冬

穀一冬出ぬけてあ〜ぬきあき  
仙何てよ冬くは〜ぬきあき  
以つて世の約束〜ぬきあき  
米山  
意山  
溜水

る、冬之部 冬部

る、冬之部 冬部

る、秋之部

粟菴

向きうてハ〜粟菴一  
ちる木の葉追て飛々〜粟菴一  
粟菴り〜おや〜浦の家  
白尾  
可葉  
田代

る、冬、新、冬、

世ノ事ニ部

大  
婦

大婦や白の柳多き無生花  
大少やまの川に下りてやあり

李且  
斗明

海  
濱

海濱りまのまの浜に昇る朝の丸  
海濱りや白の柳多き無生花  
海濱りも島の入りてやあり  
海濱りや二粒之粒の如きき  
海濱りやまの川に下りてやあり

相圃  
宗林  
生波  
旭野  
卓池

朧  
月

朧月や只のやあり白の丸  
朧月や白の柳多き無生花  
朧月も島の入りてやあり  
朧月や二粒之粒の如きき  
朧月やまの川に下りてやあり  
白の丸に里に下りてあり白  
よりのまの浜に昇る朝の丸  
朧月も島の入りてやあり  
井原の海に白の柳多き無生花  
白の丸に里に下りてあり白  
白の丸に里に下りてあり白

梅室  
我彦  
龍古  
兼其  
甘佛  
凡外  
青粒  
三つ豆  
梅葉  
可春  
甘流

ふはやちんちんちんちんちんちんちん

林玄

種

あつらねやちんちんちんちんちんちんちん

雛子女

通

通きくちんちんちんちんちんちんちん

青種

通

通きくちんちんちんちんちんちんちん

西水

角

さくらさくらさくらさくらさくらさくら

化剛

角

さくらさくらさくらさくらさくらさくら

大角

さくらさくらさくら

大

さくらさくらさくらさくらさくらさくら

好角

光号

号がまきまきうらなをを呼  
うらなまのまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまき  
まきを呼号まきまきまきまき

獲物  
光景  
相一  
相意

淨信

淨信がけけまきまきまきまき  
淨信のまきを回まきのまきまき

為山  
梅明

仲輪

仲輪がけけまきまきまきまき  
仲輪のまきを回まきのまきまき  
まきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまき

兼外  
一信  
秋号

仲輪風まつまきの輪向丸

静里

まの秋まき部

まの秋まき部  
まの秋まき部  
まの秋まき部  
まの秋まき部  
まの秋まき部  
まの秋まき部  
まの秋まき部  
まの秋まき部  
まの秋まき部  
まの秋まき部

可空  
万像  
梅室  
梅景  
希柏  
卓池  
尺外

まの秋

男

七子のあま照るや男毎一  
浮山あまらるはまぬやあまこへし

一保  
浮山

女郎花

人顔のまをハ舞うや女あま  
顔こしてまをよゆて一あま  
まをけりまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまを  
まをまをまをまをまをまを

山影  
卜早  
阜池  
厚橋  
石岳  
一危

萩の巻

細山ゆきまよや萩の巻  
まをまをまをまをまをまを

真室  
橋水

送火

送火や白もゆらけ焚あたる  
あまらるや萩の萩の巻  
あまらるや萩の萩の巻  
あまらるや萩の萩の巻  
あまらるや萩の萩の巻  
あまらるや萩の萩の巻

柴人  
後山  
卜早  
大橋

麻売

精多きやあまらるや  
あまらるや萩の萩の巻  
あまらるや萩の萩の巻  
あまらるや萩の萩の巻  
あまらるや萩の萩の巻

本島  
尾山女

尾花

水つきの依の舟より尾花あ  
あまらるや萩の萩の巻  
あまらるや萩の萩の巻  
あまらるや萩の萩の巻  
あまらるや萩の萩の巻

梅室  
尾山

新しき〜自と尾むのゆきも  
船人の考を吹くる尾むる丸  
大梅  
秋富

尾穂

解るる是を穂もつ〜ぬ尾穂不  
牛のふも吹掃し行ぬ穂不  
穂の尻よりしてさるもろわぬ  
甘山  
雪水  
清風

水

為〜水乃行〜さる〜  
大〜人〜岸〜今ぬ為〜水  
一〜穂〜餘〜自や〜  
出犯よりの考〜と為〜水  
新〜して跡〜さる〜ぬ〜水  
女  
昇左  
高谷  
梅通  
素庵

白と〜手〜傳〜お〜水  
川〜ほ〜ふ〜中〜磯田の〜水  
一 旭

尾  
鴨

鴨〜穂自も〜行尾上外  
尾〜一〜南〜書〜尾〜  
一〜相〜下〜ハ〜相〜尾〜  
一 節  
今 我  
尺 山

尾  
粘

粘〜尾〜粘の考〜  
尾〜粘〜粘〜粘の考〜  
山のさ〜粘〜粘〜粘  
南 山  
喜 家  
獲 歌

をノ冬ニ粘一

萩  
枯

照のくくは萩枯る候也  
五六百上は風行り枯る萩

白  
香

琴

をうそがさる白くもる萩  
琴もふも作してあり  
一相つくもあそと時をうの香  
をうそよ水のゆきもや夕明  
をうそよの晴退まれば

菖  
圃  
香  
象  
南  
々  
大  
林

衣  
の

衣の衣もさるの表は萩の風  
萩の衣もさるの表は萩の風

和  
柳

萩

白くもる萩のさるもさる萩  
萩もさる萩もさる萩もさる萩  
萩の内も萩もさる萩もさる萩  
萩の内も萩もさる萩もさる萩  
萩の内も萩もさる萩もさる萩  
萩の内も萩もさる萩もさる萩  
萩の内も萩もさる萩もさる萩  
萩の内も萩もさる萩もさる萩  
萩の内も萩もさる萩もさる萩  
萩の内も萩もさる萩もさる萩

其  
園  
梅  
空  
萩  
其  
梅  
空  
可  
香  
山  
山  
巴  
環  
百  
香  
物

法  
取  
裁

ありふてきくつゆは取ら  
井の子のあまも他カは法取裁  
量校のきききう教ははき  
はめく喚く思ふは乃りはは  
とあることとのとまやは取

新其  
可禮  
共費  
万像  
惟字

篇名

いさしとる故きうく篇の  
篇名は時向よきは篇名

雅  
標

法  
命  
講

人いさる生えりりるは法命講  
柿の思き柑のてうやは法命講

名  
古

法  
講

うり有くあまらり。けは法講  
家何やは法講りりの人あま

福水  
外

大

晦  
日

月とるよ進き一果が火二十  
まはや丸所教や火二十  
火二十の長き月とる余り  
東の峰き進一火二十  
陣雪のくもくも居る大晦日

法經  
方像  
確巖  
南山  
斗明

大年

大年のうり進き細の丁  
大年のうり進き細の丁

法五  
院古



田見

若水の木もそを待田見  
何喰ぬ白て生けり島尾水  
た端の井おろくゆく島尾水

一 獲物  
素山

鬼  
やうい

鬼を逃入寺の井あり樹の  
木のまき。相合ぬ寺や鬼の  
遊戯や鬼のくくハ名り何と

獲物  
其産  
子島

わノ毒ノ部

若

若尾さて能蓋をさる小蛇丸  
々年結も物布よまろくり

水山  
古補

點

木をりよまて又よる小蛇丸  
木の名傳る月よも蛇のわくり

一 蛇  
ト 卑

若夷

若夷笑うて。酒のまつる  
つら夷尾をいりてまろり

獲物  
見外

若水

若水やまろり。とらけり井の  
以ちまろり。若水はや舟尾老  
若水やまろり。まろり。まろり  
ワ水の桶や船のふくろ  
まろり。まろり。若水のまろり  
若水は井を若水はまろり

獲物  
相山  
井外  
川文  
雀笑  
二五

ワノ水の節しを何よきく

由抄

若菜

手よりハ根屋後ろ若菜丸  
相板よ根屋水口の若菜丸  
家近くあつてつる若菜丸  
ふんききく精くふたふりつる  
清くつる若菜丸  
橋の上入物してつる若菜丸  
龜火のつる若菜丸  
まつ若菜丸  
諸人もつる若菜丸

若菜丸  
一具  
若菜丸  
若菜丸  
若菜丸  
若菜丸  
若菜丸  
若菜丸

若草

つる若草  
若草  
若草  
若草

若草  
若草  
若草  
若草

若花

若花  
若花

若花  
若花

山葵

山葵  
山葵

山葵  
山葵

廿  
布

積麻染うけのあわ布や  
ゆきあけのあわ布や  
けしあけのあわ布や

接池  
栴竹  
栴竹

編  
勝

編勝は同出度家の者  
編勝は同出度家の者  
編勝は同出度家の者

尺外  
大夢  
確炭  
懐物

蕨

ひらひらとあわく  
休むるをたててわす  
ましくあつてあわく

一物  
葉圍  
草子

別  
系

こまけとあわ布の  
繩ものしつる  
柱也や枯葉の上  
結さのたのわす  
ひきましくあわく  
水仙をたてあわく

栴竹  
一物  
映紅  
映紅  
青布  
一物

木ノ身ノ物

持つてあわ布  
あわ布のあわ布

一物  
一物

若葉

てら〜と梅のまけりり〜  
り〜と梅のまけりり〜  
遠のけのあ〜と梅のまけりり〜  
このは〜と梅のまけりり〜  
風ゆ〜と梅のまけりり〜  
梅ゆ〜と梅のまけりり〜  
山ゆ〜と梅のまけりり〜  
梅ゆ〜と梅のまけりり〜  
梅ゆ〜と梅のまけりり〜  
梅ゆ〜と梅のまけりり〜

梅山  
秋田  
赤松  
良輔  
南行  
梅高  
布伯  
石谷  
素月  
志局  
大梅

若柳

よ〜と梅のまけりり〜  
小〜と梅のまけりり〜  
梅〜と梅のまけりり〜  
梅〜と梅のまけりり〜  
梅〜と梅のまけりり〜

而右  
梅山  
南行  
素月  
志局

若葉

り〜と梅のまけりり〜  
り〜と梅のまけりり〜  
り〜と梅のまけりり〜  
り〜と梅のまけりり〜  
り〜と梅のまけりり〜

梅山  
秋田  
赤松  
良輔  
南行  
梅高  
布伯  
石谷  
素月  
志局  
大梅

若竹

わが竹や春極まふし里の春  
あけやあけまきこひまきあけ  
あけやあけ同じくあけてあけのまきこ  
あけやあけまきこまきあけ風の音  
わが竹のあけやあけまきあけあけ  
あけやあけのあけまきこあけあけのあけ

わが秋の都

早稲

早稲の種やまよのせてまきあけ  
早稲の種やまよまきあけのまきあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ

若菜

早稲の種やまよまきあけあけのあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ

幕中とやまよまきあけあけのあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ

綿取

早稲の種やまよまきあけあけのあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ

忘扇

早稲の種やまよまきあけあけのあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ  
早稲の種やまよまきあけあけのあけ

橋よりくわくして扇口のまきり

可厚

渡り

命もさる時のうねりや渡り  
木のけりよ休もいさねや渡り  
浦のうねりあてぬきりりり  
まろくハキキキキキキ  
秋もや、渡りゆきや山の冷  
冷~~~~~の廣きやりりり  
るる因よ一ふらぬりあり

去る女  
秋産  
一 希原  
一 幽  
一 女  
一 梅  
一 山

残  
香

これよよよよよよよよ  
棧もころりりり世中りりり

一 化  
一 鴈

